

第十章 日露戦争

一 信用状拒絶

中村日記の明治三十七年一月廿二日に次の一節がある。

「小柳津要人正金銀行ニ至リ信用状ヲ謝絶セラル事由ヲ糺シタル処右ハ政府預金ノ海外支店ニアルモノ続々引出サレ為替金支払ノ準備金欠乏セルニ由ルト」

すなわち日露戦争がまさに爛頭焦額の急にせまってきたとの警報を心臓にぶちこんだものである。いわゆる臥薪嘗胆で、覚悟は十年前からして、年々にこれを強めてきたことから、意外とはせぬとしても、いよいよかというショックはあったに違いない。

「政府は大体において……明治三十七年より三十九年に至る前後三年において、六回の内債、四回の外債、合計十四億八千万円をおこし、更に特別会計資金六千七百万円をくりかえ使用したる計算なれば、臨時軍事費予算額十七億四千六百万円のうち約九割は借金支弁により、残余一割のうち二分は一般歳計剰余に求め、約八分だけを増税に依頼したるものというべし」(梶田民蔵「軍事税及び戦時経済」)

戦争には財政に外科治療的非常措置あるは当然のこと、丸善のこの事件の如きは大海の一波にも値せぬ出来ごと

だが、ちょうどこの時、急に「日進」「春日」の二艦を買入れるということになって、ことに海外への金融緊急措置を必要としたらしく思われる。当局者の談話をきくところである。

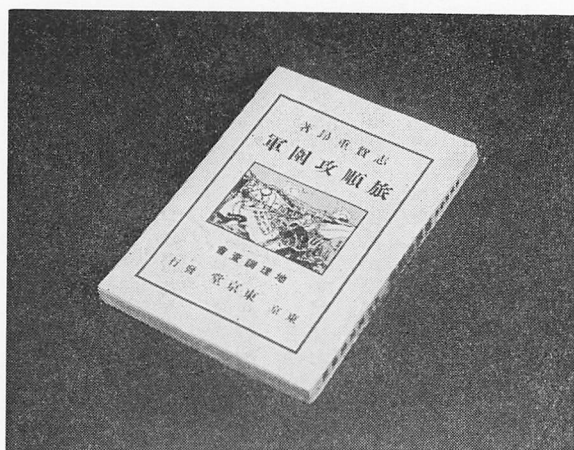
「三十六年十二月、日進・春日の二艦を買おうかどうかという問題がおこった。そう云う時であったから、私は金貨をつむことを考えて、ロンドンへできるだけ為替を買って金をつんでおいた。そこへもってきて海軍省から、日進・春日の二艦を買ってくれという話があったので、だいたい金貨をとられるのであるから、これはずいぶん考えものだといふので、いろいろ議論があったのですが、結局まあ戦争は避けられない。露国が反省してくれて戦争が避けられれば、それ程幸福なことではないのですが、そうはゆかない情勢であるので、日進・春日は買った方がよからうということになった。即ち日本の決心が露国に通じていないから、この軍艦二隻を買うことによって、日本の決心を示したら、あるいは戦争がなくてすむだろうと、財政緊急勅令案起草、十二月下旬の内閣の議をへて枢密院に御諮詢になり、同月二十八日同院御前會議に上ったものですが、そのとき顧問官の川村純義さんがたいへん激論されて、何をぐずぐずしているかと怒鳴られる程でしたが、會議がすんでから吾々の決意のあるところを話したところ、たいへん出すぎたことを云ったと申されたのですが、軍艦の一隻や二隻を買うとか、買わぬとかいっているような時じゃないと、ひどく当局の奮発のたりないことを罵倒されたのです。ところがそれでも露国がどうしても反省しない。もう一ぺん、もう一遍とくり返して反省をうながしたが、どうも満足な返事が来ないで遂に翌年二月九日開戦になり、旅順の攻撃が始まった。」（卅年前の非常時財政」阪谷芳郎談）

中村日記の二月六日に「昨夜、近衛及び第二、第八師団ニ動員令下レリト、依テ会社員中、兵籍ニ在ルモノノ為メ夜來祝宴ヲ開ク」とある。この前日の二月五日に日露の国交は断絶し、翌六日の夜中一時に連合艦隊の旗艦三笠は「各隊指揮官、艦長、旗艦に集れ」の信号を発し、露都のペテルスブルグでは栗野慎一郎公使が最後通牒をわたした。その日の晩に、上記の会合があり、丸善も戦時体制に入り、それから四日して、仁川にロシア軍艦コレーツとワリヤーグの二艦を撃沈し、旅順口に大夜襲をおこなって、いよいよ日露戦争ははじまった。まことに二十世紀初頭の大戦で、これが一波おこって万波うごく世界的影響をあたえ、第一次大戦はこれで敗けたロシアの国力の減少を奇貨として、カイゼルがその野望を伸長しようとしたのが一原因であり、第二次大戦は、日露戦争で得た日本の満洲權益がひとつの発火点をなした。

二 乃木陣中の佳話

事前の苦悩と心配に似ず、日本は連戦連勝、まさに破竹の勢いであつたから、国民は狂歡乱舞ともたとえられる満足で、各般の全生活が軍国調、戦時調一色となった。その中で丸善はあつこうのが主として外国書籍であつた加減か、戦争にまったく無関心ではないとしても比較的超然としていた。

「丸善の二階へ上ると戦争があるようではない。文学や美術の本が沢山積んであつて、これが戦争で忙しい今日売れるというは、さすがに日本人は大国民で綽々としてゐるところがある」(明治三十七年五月「学鑑」のうめ草記事)



志賀重昂著「旅順攻圍軍」

しかも丸善が、「よき書物」の取りあつかいに専心して、きわものの戦争関係出版に狂奔せぬ態度は戦地でも話題になって、それが「不都合」と非難せられるどころか、真反対に、ゆかしがられている。その最上の好例が志賀重昂の大著「大役小志」の中の一節に見られる。

志賀は札幌農学校出身の有名な農学者、丸善の当時の社長小柳津要人とは同郷の三河で知人であり、そして彼が「学鑑」と最も懇親な寄稿家であることは前にも書いた。彼は早稲田大学教授として乃木大将のひきいる旅順攻圍軍に参加の許可を得、その記事がこの時のことを記した「大役小志」の中枢部をなしている。（その部分だけ「旅順攻圍軍」と題して独立の別冊子にもなっている）

それを見ると九月四日、第十一師団長土屋光春中将をたずね、石田参謀長の案内で戦線をめぐると、彼はロシア軍のうった砲弾のカラを花筒として秋草をいけ、記念にその花瓶のひとつを志賀にも贈った。それからの記事――

「別に敵兵の落し行きたる軍隊手帖二冊を贈られ、曰く日本の軍隊にては軍隊手帖を落すを以て耻辱とし、兵は決して身より離さぬ。然るに敵兵はイクラモ落して行った。又我が軍隊手帖には開巻に、天皇陛下より軍隊

に賜はりたる御勅諭を掲げ次に軍人の服膺すべき件々を掲げあれども、彼の軍隊手帖には何等此の如きものを掲げず、開巻より巻末まで少しだに精神上の教育を授くるものなし、教育家をして彼等の軍隊手帖を比較せしむれば、種々面白き材料を発見することならんと、因て他の一冊を特に小柳津要人氏（東京書籍商組合頭取、丸善株式会社長）に贈られんことを求められた。小柳津氏は將軍も參謀長も予も三人共に最と善く識れる間柄なれば、そこで小柳津氏の話が初った。成程故福沢先生が元祿武士の魂を以て大阪商人の腕ある者、即ち西洋のマーチャント（商人）の風ある者は小柳津要人だと評された通り、明治維新の際、徴々たる岡崎藩の同志を語ひて脱走し、日本国中にある旧幕府恩顧の面面に卒先して初めて徳川氏の爲めに兵を挙げ、孤軍苦闘五十余戦、箱根の関所破りより蝦夷まで転戦し、刀折れ弾尽きて止み、遂に節を折りて西洋書を習ひ、丸善商社を起し、日本随一の洋書店となし、所謂教科書賄賂事件にも氏の姓名のみは露だにも新聞紙上に現はれず、今回日露の開戦となり、全国の書肆は武装々と唱へて力めて際物を出版し、而かも之れが爲めに何れも損耗せしに拘はらず、氏のみは恤兵、国債応募、軍人遺族の救済等には尽力し、且つ書籍組合より其の還暦の祝にとて贈りたる金時計の代金もて直ちに軍隊に献納せし程なるも、而かも書籍の所謂武装なるものを敢てせず、一も際物を出版せざるより却て何等の損耗だにせざりし事など、三人交もく打ち語った、參謀長が所謂教育家に贈らずして、特に一冊を小柳津氏に贈り呉れよと頼まれたる精神も善く判った」

丸善が、明治中期の文化的最大汚点といわれ、全出版社それに手のよごれていないのは皆無とまで言われた「教科書賄賂事件」に無関係はおろか、新聞紙上に一回だにその名が出ず、そして日露戦争には協力を惜しまぬも、「書

籍の武装」は断じてせずの一句、丸善の当時の性格と意気ごみを躍如たらしめている。

三 大陸嗜好への転移

例によって「学鑑」をみてゆくと、この年第一号巻頭にのった上田敏の「英国現代の三詩人」は、イギリス詩壇の新声を紹介して、ロセツチ、スインバーン、ウイリヤム・モリスから、セルチック・ルネッサンスに及びイエーツなどまであげている。しかし日本文壇ではイギリス文学の全盛期がようやく退潮して、大陸文学への嗜好に転移するのを反映し、いな丸善はそれを指導して、この一年間の「学鑑」に次のような紹介記事が拾い出せる。

文章家としてのニイチエ（承前）守屋源次郎

1 号

ビヨルンステルン・ビヨルンソン

〃

ヘルマン・ズーダーマン

2 号

悪党の母（モウパッサンの訳）五号まで連載

〃

ゲルハウト・ハウプトマン

3 号

ガイ・ド・モウパスサン

5 号

楼上雑話（ウエレスチャーギンの話）

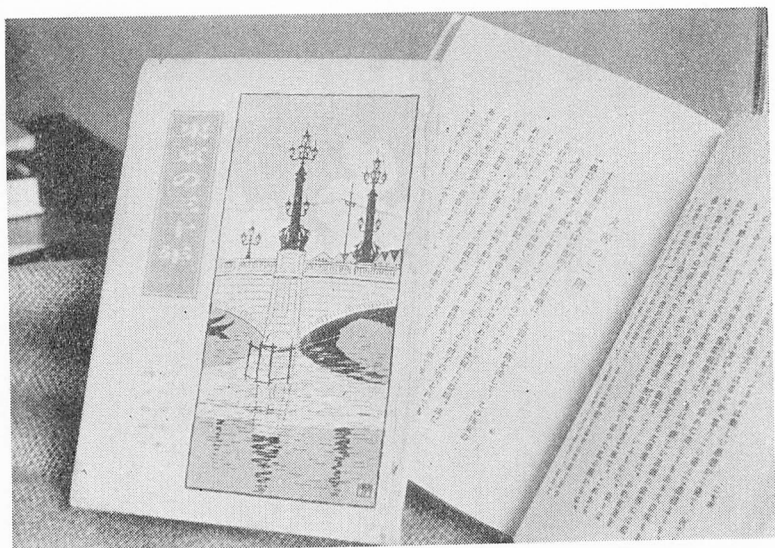
6 号

露国研究の小解鍵（トルストイの小冊子）

〃

楼上雑話（トルストイの非戦論）

8 号



田山花袋著「東京の三十年」

楼上雑話（チエホフ外数項） 9 号

ラフカディオ・ヘルン 10 号

トルストイ訪問記（次号へ連載） 11 号

ヘルン氏著書解題（大谷正信） 12 号

これは単に、日本の外国文学嗜好が、英米から大陸へ転移しかかってきたという事を意味するのではない。なかば無意識、無選択で泰西思潮を送迎してきた日本の文化界が、いわゆる近代思潮の感化を意識しはじめたという事を意味する。それまでは何十年おくれていたか知れない日本の思想が、まだ追いつけぬにしても、だいたい、先進諸国に足なみがあつてきたということを意味する。田山花袋の左の思ひ出が最も有力にこれを立証する。

「十九世紀の歐洲大陸の澎湃とした思潮は、丸善の二階を透して、この極東の一孤島にも絶えず微かに波打ちつつあつたのであった。

丸善の二階、あの狭い薄暗い二階、色の白い足のわ

るい莞爾にこにこした番頭、埃だらけの棚、理科の書と案内記と文学書類と一緒に並んでいる硝子の中、それでもその二階には、その時々には歐洲を動かした名高い書籍がやって来て並べて置かれた。勿論、それは書店でもその価値を知って取寄せたのではない。唯評判だから、一二冊取って置いて見ようといふ位の程度である。丁度田舎の、遠い辺陲の田舎の町の書店が、広告によって、中央文壇に発刊されたある二三の作を取寄せて並べて置くといふやうに……。

それを何ういふ人が買ったか。又それを何ういふ人が読んで何ういふ感じを起したか。読んで了って何とも思はずに書棚の中に徒らに並べられたか。それとも反古にされて捨てられて了ったか。しかしそのまことの種は——人類の中心にふれた種たねは、捨てられても捨てられてもついに捨てられて了ふものではなかった。ゾラのあの強いナチュラリズム、イブセンのあの深い象徴を透して見た人生、ニイチエの強い大きな獅子吼、トルストイの血と肉、『親々と子供』の中にあらはれた Nihilism、ハイゼの女性研究、さういふものは、いくら埋めても埋めても埋めきって了ふことの出来るものではなかった。極東の一孤島の新しい処女地には、いつ蒔かれるともなくその種は蒔かれて行った。

兎に角、この歐洲大陸の大きな思潮の入って来た形は面白かった。三千年来の島国根性、武士道と儒学、仏教と迷信、義理と人情、屈辱的犠牲と忍耐、妥協と社交との小平和の世界、さういふ中に、ニイチエの獅子吼、イブセンの反抗、トルストイの自我、ゾラの解剖が入って来たさまは偉観であった。勿論、それが最初から正しく入って来たか何うか。何の点まで理解されたか何うか。曲らずに、歪ゆがまずに入って来たか何うか。それは

わからないが、兎に角、近松と西鶴しかないわが日本文学の中に、烈しく凄しく、颱風か何かのやうに漲って入って来たのは事実であった。若い人達は皆なそれに向って憧憬あこがれた。」（『東京の三十年』）

つまり日露戦争を契機として、自然主義がおこって、文壇を中心に日本の全文化界を席捲した。その自然主義の颱風の目は、かく語った田山花袋個人で、独歩、藤村、秋声、白鳥はそれに引っぱられた傾きがあり、天溪、抱月、天弦、御風などの批評家はこれを援護したのだ。その花袋の言であるだけに、この文章はとくに意義ふかい。

また別に、日露戦争の勝負は、日本は戦争に勝って、思想に負けたといわれる。

この言が真ならば、その思想にまけるに、最も多くの貢献（？）をなしたものは「学鐙」でなくてはならない。この年の第六号は「露西亞小説の小解鍵（トルストイの小著述）」（円融生）と題して、前に説明しておいたチエルトロフの Free Age Press 版を紹介すること、すこぶる詳密である。

「その価すこぶる低廉にして煎餅袋を値ひする銅銭を以て」購い得べしとは魯庵でなくては云えない。

日露戦争の真最中、これほど低廉に、これほど多量に、そして最も有効にトルストイの反戦思想を伝播した冊子も、半世紀余にして全く堙滅し、研究家のあいだにその探索がひとつの課題となりながら、今や手がかりだにないのを歎かれている。幸いに、この文中に、フリー・エイジ・ブレスの目録がかかげられている。即ち――

宗教に関するものとして

1) What I Believe

金三十銭

2) Religion and Morality

金十五銭

- | | |
|------------------------------------|------|
| 3) Thoughts on God | 金十五錢 |
| 4) How I Became to Believe | 金十五錢 |
| 5) The Spirit of Christ's Teaching | 金五錢 |
| 一般道德に關する論—— | |
| 1) The Root of the Evil | 金十五錢 |
| 2) Demands of Love & Reason | 金十五錢 |
| 3) On the Relation of the Sexes | 金二十錢 |
| 4) The First Step | 金三十錢 |
| 社會問題に關する論—— | |
| 1) The Slavery of Our Time | 金五十錢 |
| 2) Some Social Remedies | 金十五錢 |
| 3) How Shall We Escape? | 金五錢 |
| 非戰爭論—— | |
| 1) Patriotism and Government | 金十五錢 |
| 2) Letters on War | 金十五錢 |
| 3) The Peace Conference | 金三十錢 |

人生批評に関するもの——

1) On Life

金三十錢

2) The Meaning of Life

金十五錢

3) Modern Science

金五錢

小話その他文芸に関するもの——

1) Walk While Ye Have the Light

金十五錢

2) Popular Stories & Legends, (1st and 2nd Series)

各二十錢宛

3) Ivan the Fool

金五錢

4) Guy de Maupassant

金三十錢

而して特に「以上は……一にトルストイ研究または社会主義研究の資料とすれどもその所論の多くは眼前の事実を捉えて以て批評を下すが故に暗黒なる露国を研究する鍵たるべきなり」と、いいわけを付記し、爪点をうっているのが面白。

このフリー・エイジ・プレスは、ドイツのレクラム版、イギリスのエヴェリマンズ版の如く、現在は存続していない。またボーンズ・ライブラリやスコット・ライブラリなど、いまは消滅しても布製の上製本だから、図書館にも、読書家の書斎にもこのつてゐる。上記のフリー・エイジ・プレスにいたっては、「センベイ袋にも値せぬ」安ものの片々たるトラクトだから、これでトルストイを勉強した人も、のちに全集もしくは装飾的な書物に買いか

えて、保存している人がなく、図書館にもめったに見当らない。しかしそれが日本文化に及ぼした感化影響は著大で、日露戦争において、日本が思想的にはロシアに負けたというのは、主としてツルゲエネフ、ドストエフスキ、チエホフ、ゴゴリあるいはベリンスキイやメレジコフスキイ、またはロシア革命の先駆者のゲルツェン、バクーニン、ブレハノフなどをふくめた広汎なる範囲のものをさすのだが、何としてもトルストイが中心で、トルストイの思想はそれら諸家の思想の撮要総括のようである。極言すれば、日本は思想的にロシアに負けたのでなく、一トルストイに負けたのだ。そのトルストイを伝播した最も重要なフリー・エイジ・プレスだから、湮滅を惜しみ、以上の如く書目をかかげて大綱をしのぶこととしたのである。こういう刊行物にでも採録しておかなくては、永久に忘却せられることを恐れたからである。なおこの版は第一次世界大戦終了の大正八年まで丸善で販売されていたから、これ上記書目以後に出版された書冊も新加追刊せられたにちがいない。

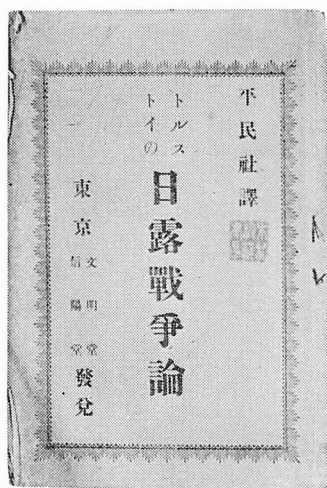
四 「君死に給ふことなかれ」の藍本

この年、トルストイが世界をショックしたのは *Bethink Yourself* (悔い改めよ) という長論文を発表したことである。これは彼の日露戦争批判として、執筆中から評判が立ち、反戦論の彼がどういう立場を取るのかは、世界が疑問とした。フィラデルフィアの新聞は電報で「あなたはロシアの味方か、日本の味方か、それとも両方に超然としているのか」との質問を発してくるし、フランスの新聞「ル・タン」にもその点に関する公開状があらわれるし、又「フィガロ」の記者ジョルジュ・プルドンは、その意見をききに、わざわざパリから、ヤースナヤ・ポリ

ヤーナの村莊まで出向いた。

そういう矢さきに、いよいよ「悔い改めよ」は現われたが、戦争にたいするトルストイの嫌悪と反対と不機嫌を赤裸々に現わしたものととして海外報道がその内容の大略を伝えた。日本では読書界待望のうちに、それを掲載したロンドン・タイムス本紙が到着し、「朝日新聞」と、その朝日新聞社から切抜を提供された「平民新聞」とのみが、その訳をかかげた。他新聞はおそらく、その語気の激しさを憚って、これを公けにする勇氣をもたなかったであろう。

「平民新聞」では幸徳秋水と堺枯川がこれを共訳し、大胆無謀きわまる話だが、全紙面をこれを以て埋める特集号を発行し、安部磯雄の名をもってその新聞を、手紙を付してトルストイに送ると、トルストイは非戦の同志が日本にも運動している事実のあるのを知って、よろこんで返事をよこし、交戦中、反戦論者がたがいに通信を交換し



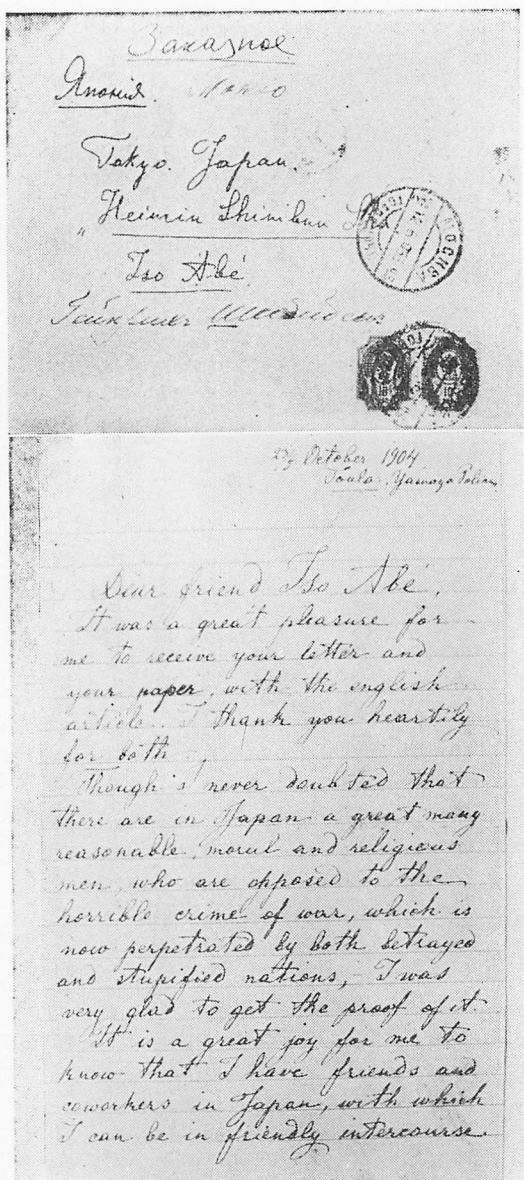
「トルストイの露戦論」

て、敵国通謀にも問われぬ寛大さであった。この手紙は、トルストイ書翰中でも最も重要なものの一として知られ、ロマン・ローランの名著「トルストイの生涯」の中にも一節が引用せられている。(原物は久しく行方不明になっていたが終戦後になって早稲田大学野球部の保存する古雑誌のなかから発見せられ、同大学資料室にて原物同様の複製をつくって同好に配付し、実物はトルストイ記念展の時、ソヴィエト連邦のトルストイ博物

館の懇望によって安部民雄教授から寄贈せられた）

このトルストイの論文はひいて詩壇にも影響を及ぼし、与謝野晶子の有名な「君死に給ふこと勿れ」（「明星」明治三十七年九月）の詩は、内田魯庵の紹介した非戦宗教徒のドウホボールの行動と、トルストイの日露戦争批評の「悔い改めよ」から思想はおろか用語まで借りもちいている。

これは実弟が兵に徴集され、旅順攻囲軍中にあるのを歎いて、肉親の真情をあらわさうい、ぶちまけたもので、



安部磯雄に宛てたトルストイの手紙

ことに次の二節が、世を衝撃し、世論を沸騰させた。

旅順の城はほろぶとも

ほろびずとても何事か

君知るべきやあきびとの

家のおきてに無かりけり

君死にたまふことなかれ

すめらみことは戦ひに

おほみづからは出でまさね

かたみに人の血を流し

獣の道に死ねよとは

死ぬるを人のほまれとは

大みこゝろの深ければ

もとよりいかで思おもされむ

(「明星」辰歳第九号)

余分の説明をのぞいて、「旅順はほろぶとも」は平民社訳の「旅順口にたいする清人、日本人もしくは露国人の権利の承認と何の交渉あらざる也」から来ているので、トルストイの原文は、

“The work of my life has nothing to do with recognition of the rights of the Chinese, Japanese or Russians, to Port Arthur”

である。又「すめらみことは戦ひに、おほ自らは出でまされ」は「之が主なる責任者たる露国皇帝は断えず兵士を点閲して彼等に感謝し、賞与し、且つこれを奨励す……汝心なき皇帝、○○皇帝……汝ら自ら砲弾銃弾の下に立てよ、我等はもはや行くを欲せず、又決して行かざるべし、願はくば我等を平和の中におけ、我等は耕作し、播種し、建築し、而してまた汝等を養うべし、汝懶惰なる者よ」との訳文から来ている。原文は次の如くである。

“The Tsar, the man chiefly responsible, continues to hold reviews of his troops, thanks them, rewards and encourages them……Well, go yourselves, you heartless and godless tsars, mikados……Go yourselves and face the shells and bullets! We don't want to go, and won't go. Leave us in peace to plough, sow, build and feed you—our parasites”

晶子がトルストイのこの論文から感発刺戟せられて、この詩をつくった証拠には、この以前、彼女にはこれに類似の非戦気分をうたった詩文はほとんど——いや全く見つからない。そして突如として現れ、それきりで、又突如として消滅した。あとがつづかなかったのは、大町桂月の「乱臣賊子」とのしつた苛辣な筆誅が身にこたえたからであろうが、それにしてもこれを地金の思想として抱いていたのなら、事前に多少ともその地鳴りがしておらねばならぬ筈である。

ただし、たとえ突発的に風の如く現われ、風の如く消えたとしても、晶子のこの詩が明治詩壇の絶品のひとつで

ある地位に動きはない。

秋水、枯川や、安部磯雄や、与謝野晶子にこのような影響を与えても、一般日本は、この論文に存外不感症であるか、あるいはその影響をおそれて軽視する傾きがあった。

「学鐙」の九月号の毎号連載の「楼上雑話」はまずチェホフの死を報じ、次ぎにトルストイのこの論文にふれよう。

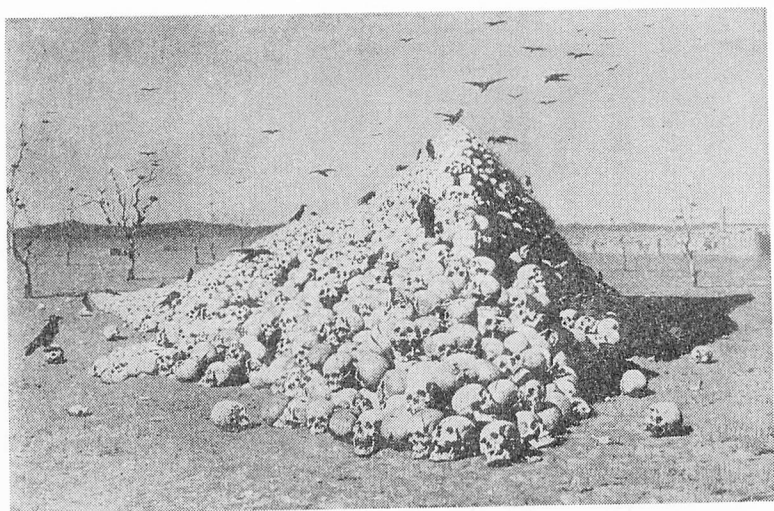
「トルストイの日露戦争論は、日本でも諸新聞に紹介せられ、且つ一冊子となつて公けにされたから、兎も角も広く読まれた。それでこれに關し種々の批評があるが、中には随分皮肉な惡語を放つたものがある。もちろんこの非戰論は、トルストイが開闢以來はじめて主張したわけでなく、二千年來「兵は兇器なり」の原則は専門兵家流にすら唱えられている。その理由は極めて單純なものである。忠孝説にすこしも斬新警拔な議論がなく、いつでも陳套をきわめていると同様に、非戰爭論にさらに珍しい理窟を発見することはできないのである。ただロシヤのような專制國にあつて、古えの予言者が不靈の民を叱咤する如くに、露帝の妄動をいましめた態度を偉いなりとせねばならぬ。近ごろ聞くところによれば、この警策はひそかに印刷せられて、あまねく全露國に配付され、露國の民心を動搖すること尋常ならざるによつて、政府部内の者はトルストイを以つて逆賊と見なして、シベリヤに流竄する内議があつたそうだ。トルストイの傲岸不屈常に自家の所信を告白して少しも政府を憚らざる挙動にたいする制裁の内議はこれまでも度々であつたが、世界におけるトルストイの声望を犯すことができなかったのである。しかし今度は如何に処置するであらうか。露廷および露政府の對トルストイ

態度がすこぶる注目すべきものである。」

この筆者の善六（内田魯庵）は日本におけるトルストイの評判の番犬を以て任じ、何かの物音がすれば、すぐ聞き耳を立ててとがめるように、トルストイを碌すつぽ読みもせぬ学者や名士や新聞記者が一知半解の非難や不満をのべると、がまんがならず、すぐそれに噛みついて、相手を沈黙させるか、その言を是正させずにはやまなかった。魯庵は画家ヴェレスチャギンの死を弔うにあつても次の如くに云っている。

「ペテロバヴロフスク号の沈没と共にヴェレスチャギンの溺死したるは今や全く事実となれり。この美術家はトルストイと並び立つ世界的名誉ありて、ある意味にてはマカロフ提督を喪うよりも、露国の損害は更に大なりと信ぜらる。その年齢よりいえば七十何歳の老齡なれども、もし彼をしてこの空前の海戦を実見せしめて、しかる後無事に帰国せしめば、恐らくは彼の名誉を更に大に加うべき一大戦争画をなして、露国の宝物として戦争によりて失いたる損害を、美術によりて償うを得たりしならんに、誠に惜しむべきなり。さるにても世界を睥睨するマカロフ中将与、宇宙を空しうする大美術家とが千秋の遺恨を抱いて艦とともに覆没するは空前の、おそらくは絶後の大悲壯劇なるべし」（五月「雑録」）

当時の読者はこれだけの記事で何の意たるかを了解したのだが、いまの読者はわかりかねるだろう。ペテロバヴロフスク号というのは旅順にいた主力戦艦で、それが四月十三日（明治三十七年）日本艦隊出撃のため港外に出ると、砲火も交えぬうちに、わが敷設水雷にかかってあッという一瞬のうちに沈没した。よくよくついていなかったのだ。



ヴェレスチャーギン画「戦争礼讃」

これにマカロフ提督がのっていた。これは当時世界の三大海戦戦術家といわれ、その名声の前に出ると東郷などは、もちろん無名の一海将にすぎなかった。しかしロシア極東の海戦で敗戦の悲報が相つぐので、マカロフ自ら腰をあげて旅順にきて、直接指揮にあたって、廻瀾の頹勢を既倒に返すを計ったのである。ヴェレスチャーギンはこれに同行したのだ。

彼は、世界一の戦争画家と称された芸術家で、ことに名高いのは「戦争礼讃」と題する作で、髑髏をつみかさねたピラミットの上に、凄雲ただよい、飢鴉むれとぶ情景は、だれでも見知っている。また最大傑作と称せられているナポレオン敗北の連続画はヨーロッパ各都を巡廻して展覧し、ことにウィーンでは二週間の会期に十万人の見物人があつまった。したがって戦争画といっても彼のは、その士気鼓吹の絵でなく、戦争反対絵なので、

「プレブナ役後と題する図も有名なもので、野戦電信柱の何本となくならんでたてられている路傍に沿うて、無

数の累々たる死骸が破棄せられたる軍器といっしよに雪に埋められている。その上を何羽となく鴉がとびまわって中には死骸の上にとまって啄ばんでいるのもある惨澹きわまっている図である」

四月十三日は、その名将マカロフの最初の出陣の日というので、旅順要塞司令のステッセル以下、港に見おくり、その必勝を確信し、また祈念した。ヴェレスチャーギンも欣然として同乗したのは、もちろんそれが沈むなどとは、かりそめにも思わなかったからである。案に相違して、まことに呆気ない結果となったのには、日本はほつと安堵の息をつき、全世界が一大衝撃をうけた。日露海戦の勝敗はこれが分け目であったと云ってもよい有名なできごとである。

魯庵は別号に章をもうけてヴェレスチャーギンを吊うているが、トルストイの記事をはじめこれらを通観すると、世をあげて戦争の勝利に狂飲しているのを度外視し、きわめて冷々淡々としている。あらわに否定も反対もしているのではない。それはキリスト教の平和運動や、平民社の反戦論のような、外に目立つければしきのないのは、商社の機関誌として当然だが、暗黙のうちながら非戦の態度がうかがわれるのは、この雑誌の使命からすれば、少しゆきすぎであろう。

しかし魯庵は日清戦争の時にも、敵国との戦にのみ勇ありて、文明の戦いに怯ならば、畢竟ズールー程度の土蛮の行為のみと論じて問題をおこした批評家である。「学鐙」のこの姿勢は、存外日本にもようやく生ずる兆候のみえてきかかったインテリゲンチヤをひきつけ、後々のこの雑誌の声価をあげるのに役立ったかも知れぬ。

五 ラフカディオ・ヘルンの死

この八月二十六日にはラフカディオ・ヘルンが亡くなり、これは日本人にとってはヴェレスチャーギンの死亡以上の損失だったのであろう。魯庵は、ヘルンの文章に傾倒することすこぶる深いものがあり、世紀のうつりかわりの時、雑誌「ブックマン」が「十九世紀の十五大文豪」としてヘルンをあげた爛眼を、つねに賞揚してやまなかった。その位だから「学鑑」の雑報（第十号）にも「ヘルン氏の訃」をみずからペンをとって草し、別に「万朝報」にのった山県蠡湖の「故ハーン氏」と「時事新報」にのった野口米次郎の「ハーン氏未亡人との対話」の全文を採録し、号をあらため（十二号）大谷正信の「ヘルン氏著作解題」を掲載した。この前後に沼波瓊音や大谷繞石の俳句英訳に関する文章にもヘルンのことは、しばしばくり返されている。論壇の飛將軍として魯庵のひそかに注目をおこたらなかった高山樗牛や、かつての魯庵の友人であった作家尾崎紅葉の死にたいしても、「学鑑」がこれだけの頁をさかなかった。ただ、傾倒の深かったにしては、健筆の魯庵みずから、これを書いていないのは、おそらく大谷正信（繞石）が松江の中学から、ひきつづいて東京大学の英文科にいたるまで、ヘルンの随一の愛弟子であったから、これに譲ったのであろう。繞石はしばしば魯庵をおとずれ、先輩の礼をとっていた。

この年雑録で注意すべきは「太平洋画会」（五号）の記事があることである。

「白馬会以外に一旗幟を立つる青年美術家より組織せらるる『太平洋画会』は五月一日より六月六日に至るまで上野五号館に開催せられ、諸家の名什少からざれども、取わけて河合（清雄）氏の山水画、鹿子木（孟郎）

氏のデッサンは注意すべきものなるべし。また住友家の嘱によって鹿子木氏の臨摸したる仏独名家の画十数幀は印刷画以外に実物を見るを得ざる本邦人のためには少なからざる参考となるべし。編者が観覧したる折はローの作一幀のみにて、他はなお未着なりしが、森敵なるローの画趣は十分に能く描かれたり。又『賄賂』と題する新海氏の石膏塑像は剛健なる蛮勇を化現したる裸体男子の六尺大の像にして、満身に活力を充溢したる筋肉の物ふるればたちまち反撥せんとする状まさに躍動せんとするが如し。雕塑界近年の傑作なるべし。同氏はまた弊社にて販売せるダンテおよびホーマーの原型を出品せられたり」

この雑録をよんで思うのは、日露戦争のころは、日本の経済力が貧弱で、いわゆる泰西名画の原画は、模写以外には見るを得なかった。なまの原画が大量にはいって、公衆が自由に観覧できるようになったのは、これから十数年たって第一次世界大戦後に、岡山県倉敷に大原美術館がたつて以後のことである。

住友の富を以てして、世に先鞭をつけ、鹿子木孟郎に依嘱して、名画の模写をつくらしめたのを、太平洋画会で展示した。それを逸はやく魯庵がみにいっているのだ。

この魯庵の嗜好が、しだいに、西洋近代名画の精巧な複製の移入となり、やがて丸善と「白樺」の関係になって満開することを思えば、これらの記事も等閑には見すごし難い。